

# 海外から訪れた若者たちの思い出

## —東京下町の日本家庭にホームビジット

吉田 厚・洋子

※編集部注：吉田ご夫妻には日外協の活動に長年ご協力いただいております。この招へい事業の初期に実施していた「ホームビジット」(日本家庭体験プログラム)受け入れにもご協力いただいた。タイトル下の画像はその後も続いた彼らとご夫妻の交流のごく一部。

### 江戸の下町風情が残る池之端で

シンガポールのリー・クアンユー元首相が亡くなられ国葬があった。妻子と一緒に現地で暮らしている我が家の長男は、Facebook にこう書き込んだ。「僕の父は、ベンジャミンシアース橋の開通式のテープカットがTVで放映されたとき、あのリー首相の隣に写っていた……」。息子は当時9歳だったが、よほど印象に残ったのだろう。私の隣にいたのは別の大臣だったけど。シンガポール駐在時代の出来事である。

池之端といえば池波正太郎の『鬼平犯科帳』や『剣客商売』によく出てくる場所であり、江戸の下町風情が少し残っている。スピーチ・コンテスト優秀者のホームビジット先として、日外協はそんな上野池之端の我が家を選んでくれた。

昔、私たち家族が現地に駐在していたからだろうか、マレーシアとシンガポールの人が数回来てくれ、ギリシャ、インドネシア、フィリピンの人もお迎えした。

マレーシアのクー・ソック・キエンさんは、現地大学の修士課程を終え、当時は東京水産大学と呼ばれていた大学の博士課程に留学が決まっていた。お手紙も何通かいただいた。彼女のスピーチを今でも保管しているが、日本を冷静に観察している彼女の頭脳を垣間見る思いがする。おそらく今は現地の大学で教鞭をとっているのではあるまいか。いろんな若者と交流したが、良い時代だったと懐かしく思っている。

優秀者のスピーチ発表会の最後は馬越恵美子教授の講評。先生の講評は素晴らしく、それをお聞きすることも毎年の楽しみとなっている。(厚)

### 天ぷらを喜び、娘とも触れ合う

1989年の第4回発表会から1995年の第10回までの間に合計6回ホームビジットのお客様を池之端にお迎えしました。

最初の年から最後まで、アメ横を通り抜けて、谷中、不忍池をめぐる我が家まで、日本的な風情のある街並みを通してホームビジットの方々をご案内するコースが定番となりました。

夕食には必ず天ぷらを揚げましたが、大変好評でした。天ぷらはどの国の人の口にも合うし、合わせられる、日本が誇れる料理です。

2回目(1990年)のマレーシアのウォン・ライヨンさん、シンガポールのウン・シャオ・ミエンさん、ギリシャのマリア・スタサコプールさんの時は、交換留学先のオハイオから都立上野高校3年に戻っていた我が家の娘が積極的にプランを立て、学校の茶室でお茶会をしてくれました。翌年の3回目(1991年)では、フィリピンのルファ・フロル・サンドバルさんとギリシャのヨアナ・パパドプルさんを谷中の書道教室へ案内して、墨で大きな字を書いてもらいました。白い紙にお気に入りの字を選んで書くと、先生から朱色の花丸をもらいました。黒と朱色の鮮やかなコントラストに、みなさん大変気持ちが良かったようです。

日本語の優秀者というだけあって、どなたも日